日本野鳥の会

No.44
1997年11月発行

新潟県支部報

マイ　スコープ

「平野部の農耕地に生きる鳥達」

西蒲原郡潟東村　岡田成弘

東に信濃川・中之口川、西に角田山を望む西蒲原水田地帯は、かつては鎧潟、大潟、田潟をはじめ大小の湖沼が点在する広大な湿地帯で、多くの鳥が生息していたと言われています。昭和40年代初めの鎧潟干拓を最後に湖沼は全て消失しましたが、現在もまだ多くの野鳥が季節の移り変わりとともに訪れ、餌場として休息場所として利用しています。

ホバリングで獲物を捜すチョウゲンボウ

春、水田に水が湛えられ、稲の苗が植えられると一帯は緑の大湿原となり、シギ・チドリ類が立ち寄り、水生動物や昆虫を狙ってサギ類が訪れます。秋冬季は、稲刈り後に育成する2番穂や落ち穂を食べにハクチョウやヒシクイの群れが飛来し、夜間には代わって淡水カモ類が餌を捜します。また農耕地にはネズミ類が多く生息しており、それらを餌とする猛禽類も数多く飛来し、冬季はトビよりもノスリが多く見られるほどです。チョウゲンボウは毎年繁殖が確認され、周年生息しています。また広大な水田地帯に島状に点在する集落ではトラフズクが繁殖し、集団越冬も観察されています。

潟東村で繁殖したトラフズクの若鳥3羽

農耕地という人間が作り出した単一な環境の中でも鳥達は資源をあますところなく利用し、懸命に生きています。今後急速に変わって行く環境に鳥達がどのように適応して行くのか、これからも調査・観察を続けていきたいと思っています。

1997年　小千谷市山本山のワシタカ類の渡り

長岡市　末崎　朗

このところ、ご無沙汰していましたが、今年は小千谷市の山本山で過去最大数のワシタカ類の渡りが観察されましたので、支部報の紙面を借りて報告します。

表－1に今年の山本山での観察結果を示しました。9月6日から10月21日まで行なった26回の観察で、延べ2,232羽のワシタカ類が記録されました。これは山本山での過去の記録と比べて、最も多い数字です。('93年808羽、'94年1,234羽、'95年626羽）個体数が増えた原因としては、観察回数が増えた事があげられますが、今年の場合9月20日に1日だけで911羽という、私が知りうる限りでは新潟県で最大数の渡りをほぼ一日中観察し、記録することが出来た事が大きかったと思います。この9月20日の観察結果については後で述べさせてもらう事として、ここでは今シーズンの観察結果についてもう少しふれてみたいと思います。それぞれの種類ごとの渡りの時期としては、サシバが9月中旬～下旬、ハチクマが9月中旬～10月上旬、ノスリが10月上旬～下旬と記録数の多い種類については傾向がはっきり出ています。この傾向は、過去の新潟県内での観察記録も同様であり、ほぼ間違いないと思われます。（ただし、ノスリとハイタカは11月も渡ると思われますので、今回の観察結果では、その渡りの終わる時期について述べる事は出来ません）

記録数については、これだけ観察回数を増やしても、まだ見逃しのある可能性はありますが、今後山本山での観察回数が増えてもサシバ、ハチクマの場合は、それぞれ1,000羽前後ではないかと思います。また、牧峠等では、ハチクマの方がサシバより多く記録される事が多いのに対して、山本山では、サシバの方がハチクマより多く記録される傾向が強い事も言えると思います。ハチクマよりもサシバの方が標高の低い所を好んで渡る傾向がある為ではないかと私は考えています。

表－2には先程述べた9月20日の観察結果を時間別に記しました。今年の9月は、不順な天候の日が続き、9月20日より前の9日間程雨や曇であった為、ワシタカ類は渡りに条件の良い日を待っていたと思われます。この日は、朝の7時半からもう渡りが始まっています。また午後に渡る事は、少ないと考えていたサシバも13：30から14：00の間に69羽も渡り、ハチクマについても15：30から16：00の間に51羽も渡った事が観察されました。結局渡りは、この日16：30頃まで続き、新潟では、ワシタカは午後に余り渡らないと考えていた私には意外な結果でした。この日だけが特別だったのかどうか、今後の観察が待たれる所だと思います。また私はこの日、最初から山本山で観察をしていたわけではなく、山本山から渡って行くであろうと予想した川西町の白倉峠という所で観察しており、午前中にいくつものタカ柱が出来た様子を見てはいませんでした。午後になって観察していたほとんどの皆さんが帰られた後、山本山に行って引き続き観察を行ったのですが、午後だけでも278羽の渡りを観察することが出来ました。ある意味では、こういった特別な日の記録を残すことができ、幸運だったと言うべきかも知れません。

また、今シーズンは、この9月20日の翌日の21日に山本山とその周辺で一斉調査を行ないました。渡りきった後で、しかも天候もあまり良くなかった為、明確な傾向のある結果は得られませんでしたが、県内全体の観察結果も含めて次号の支部報で報告させてもらいたいと思っています。

なお、今回の報告のデータは、そのほとんどを小千谷市の中山正則さんと篠田正則さんからいただきました。あらためて御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

表－1　1997年小千谷市山本山におけるワシタカ類の観察結果

単位：羽

種類＼月日	9／6	7	10	15	18	20	23	24	25	27	28	29	30	10／1	2	3	4	7	9	10	15	17	18	19	20	21	計
サシバ	－	－	36	3	22	633	1	32	96	41	1	－	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	873
ハチクマ	－	－	7	－	23	248	－	21	62	37	25	1	153	65	32	31	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	712
ハイタカ	－	－	4	－	1	19	－	9	12	19	3	2	35	11	16	36	12	6	4	12	10	38	17	20	8	7	301
ノスリ	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	1	－	2	1	3	12	14	3	3	4	12	35	16	87	36	15	276
ミサゴ	－	－	－	－	1	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	1	1	1	9
オオタカ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	2
ツミ	－	－	2	－	－	1	－	－	－	－	－	－	2	1	－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	8
イヌワシ	－	－	－	－	－	2	－	－	1	1	1	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8
チゴハヤブサ	－	－	－	1	－	－	－	－	1	1	3	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7
チョウゲンボウ	1	－	－	－	3	2	－	－	5	1	2	1	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	16
ハヤブサ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	2
大型不明種	－	－	－	－	7	2	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	13
小型不明種	－	－	－	－	2	1	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4
ハヤブサ科不明種	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
計	1	0	49	4	60	911	1	63	183	100	36	4	203	78	53	80	33	9	8	18	24	74	33	108	46	53	2,232

表－2　山本山における9月20日の時間別観察結果

単位：羽

種類＼時分	7:30～9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30	16:00	16:30	計
サシバ	213	69	69	50	20	43	5	15	13	29	69	28	2	－	8	－	633
ハチクマ	53	8	22	13	30	9	11	8	2	2	3	3	7	24	51	2	248
ハイタカ	－	5	1	4	3	2	－	－	－	2	－	1	－	－	－	1	19
ミサゴ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	2	3
ツミ	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
イヌワシ	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
チョウゲンボウ	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	2
大型不明種	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
小型不明種	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
計	266	82	92	70	53	57	16	23	15	33	73	33	9	25	59	5	911

☆7時30分～9時までは、1時間半分の集計。他は30分ごとの集計。

オオタカは語るよ

新潟市　藤田英忠

新潟市太夫浜と島見地区において、オオタカをゴルフ場の建設阻止の砦として、結局建設中止に追いやった住民運動は、広く全国に有名になった。このゴルフ場反対運動にオオタカを持ってきた事は、野鳥の会県支部の協力、とりわけ保護部の支持があったからに他ならない。

ここ2・3年奥只見の電源開発域にイヌワシが生息並びに繁殖している事から、開発に問題ありと、あるいは問題無しと双方がにらみ合っているような状況が見える。

オオタカを追ってみて見えてくる事は、ほんの一部に過ぎないが、確かに同じ猛禽類だからこそこのゴルフ場でオオタカから学ばせて貰った事をイヌワシのそれにつなげて行かないと、と思う気持ちは新潟の端くれにいて生じて来る。しかし、オオタカを追っていた人が、その観点からイヌワシの生態について論じている事をイヌワシを知らない者が何を言うか、と批判されていた事もあった。ここは、本当に難しい点だと思う。確かにオオタカとイヌワシとは大きさも生息域も繁殖傾向も異なるけれど。

ただし、人間サイドにおいての行動のもっていき方はそんなに変わるものではない。そこで新潟市におけるゴルフ場建設反対運動の成果を整理しておこう。

新潟市においてゴルフ場が造られるかもしれないと言う噂がこの直接の当事者でない一市民の小耳に伝わってきた時、行動として何をしたのか。まず事実はどこまで進んでいるかを調べた。これは意外にも進んでいて、現地説明もなされていた。また、土地の大部分の県有地を業者が既に買収していた為、事は複雑であった。

次に反対する為の会を結成した。この会がまずやった事は土地所有者であるなしに関わらず、現地の人たちにとってこの地域の環境の素晴らしさと建設後の地域の環境改変について根気よく説いて行く作業であった。

この草の根の活動から、地域の土地所有者の中からも反対する意味を感じ取ってくれるような仲間が現れてきた。

崩落寸前の巣にいるオオタカのヒナ

次に環境即ち自然の素晴らしさを説く具体的な指標になる生物が必要である。これにオオタカが加わったのである。このオオタカを観察しながらオオタカの生態のまだ解らない部分を研究し、オオタカのネットワークの輪も広げて行った。これには栃木のオオタカ保護ネットワークの方々や日本野鳥の会栃木県

支部、新潟県支部、山階鳥研の各保護部の方々に大変協力を頂いた。

これもオオタカを自然保護の象徴とする輪の広がりと思っている。また、この方々にとっても一つの猛禽類が自然生態系の中で果たしている役割についての認識を新たにしてくれたのではないかと思っている。というのはこの頃全国各地でオオタカの生存を危惧する声が起こり始めたのである。実際、新潟県でもオオタカの繁殖・営巣調査が行なわれた。そして当事者の建設業者も真剣にオオタカの観察調査・学習をしていった。さらに建設業者との間でオオタカをめぐる生態のとらえ方の火花が散るのであった。筆者もそれらの人に負けまいと、随分観察調査をしたものである。またオオタカの監視もやらざるを得なかった。というのは、これを契機にいろんな人が無秩序にオオタカの巣を見に来るのである。これによってオオタカが巣を放棄でもしようなら大変である。実際、この地区にいた2番のオオタカのうち一方のオオタカは毎年巣の場所が一定していなかったため、繁殖には苦労をしていた。

子育て中のオオタカの♀
また巣がしっかりしている頃

オオタカは里の鳥である事も分かってきたため、オオタカと共存できる人里の環境が実は素晴らしい事なのである、という理解をもっと多くの人と共有していくために、ゴルフ場の反対の署名運動を展開して行った。ゴルフ場はオオタカを追い出して、特定の人の為に単純な植物相（芝生のみ）を人工管理（農薬で）していく異常な環境である。この事を訴え「オオタカが安心して子育て出来る環境こそ、人間も安心して生活出来る環境である。これが人と自然との共生である。」この事が全国に理解され浸透して行く喜びを感じつつこの戦いの勝利を確信して行った。

オオタカの巣がある松林
まつくいむしにかなり侵されている

以上の運動の中で得た事から提案をさせて貰えるなら、イヌワシの場合、電力開発会社とNGO市民団体が同じレベルで討論出来るぐらいに、双方ともイヌワシの生態研究をするべきである。その過程で解った事は他の多くの人に伝え、そこからも多くの人の意見を聞く事を大切にして行けば、必ずあるべき方向が示されるはずである。

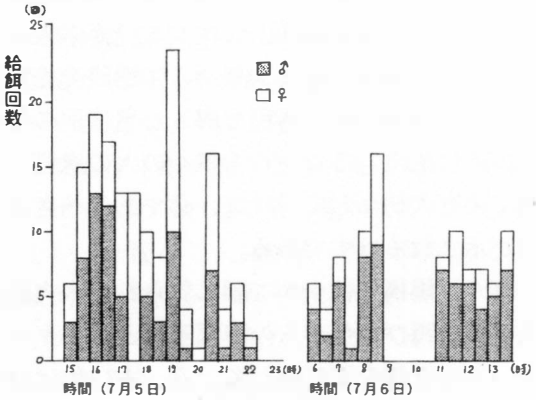
ゴルフ場構想はやがて闇に葬られ、太夫浜鳥見町は再び昔ながらの田園風景とオオタカのいる海岸林を取り戻している。古い巣は自然崩落してもオオタカはそこから少しの距離のところに新巣を作ったり拝借したりして、繁殖の営みを今も続けている。

白夜の中の鳥たち（Ⅳ）

南蒲原郡栄町　渡辺　央

ユキホオジロの育雛を観察する

ユキホオジロについては前回のシュミット空港における探鳥の中でその子育ての様子を紹介したが、ここチャウンステーションでも3番い繁殖していて、食堂の窓越しからもすぐ隣の建物の屋根に出入りしている育雛中の番いが観察された。私は北極圏に来るに当たって、白夜の中の鳥の日周活動に少なからず興味を持っていた事もあって、ステーションに来て2日目の7月4日から6日までの間に渡ってこのユキホオジロの育雛の様子を観察する事にした。この番いの育雛はすでに後半に入っていて、観察3日目の7月6日には3羽の雛が巣立ちをしている。給餌には雄雌が共同で当っており、7月5日の午後3時から餌を運ぶ数の割合は、雄が46.2％、雌が53.8％で雌がやや多く運んだが、翌日の午前中の運搬回数を見ると雄の方が74.7％と多く運んでいる。給餌に関わる雄雌の仕事率はほぼ半々なのではないだろうか。午後3時以後に餌を運んで来る時間帯を30分おきに見ると、午後7時から7時30分の間に最も多く運んでいる



ユキホオジロの雄と雌の給餌回数

（グラフ参照）が、概して午後3時半から6時頃までは安定的に運ばれていて、それ以後は時間帯によってやや不安定になり、そして、給餌活動が途絶えた時間を見ると、7月4日は午後10時13分に雌が給餌に来たのが最後で、翌日は午後10時21分に雄が最後に給餌をし、10時50分に雌が巣の近くに来たのが巣には入らず、そのまま0時30分まで観察を続けたが、番いは姿を見せなかった。この番いの採餌場所であるが、ガチョウの飼育小屋近くの汚水が流れ込んでいる湿地や堆肥の積まれた周辺、それに、私が観察している食堂の窓のすぐ下にある生ごみの積まれた所にも頻繁に訪れて餌を採っていた。このような採餌活動も当然給餌がなくなると同時に途絶えたが、ここにはハクセキレイも頻繁に餌を採りに通っていて、ユキホオジロも遅くまで活動していたが、それも午後11時32分には終了した。以上、わずかな観察であるが、どうも白夜といえども午後11時頃には鳥の活動も少なくなり、ツンドラ全体が静になる感じがするのである。翌朝、午前6時に食堂に行くと番いはもう盛んに活動していて、7時過ぎには1羽の雛が巣を出て、そのまま地上に落ちてしまった。それを管理人のマリーナさんが朝食の支度に来る途中拾って私のところに持って来た。私はその雛をまた屋根の上に投げ上げておいた。観察中、雛の鳴き声がする為か、巣のある建物の周りには常にセグロカモメが5羽程集まって来るし、猫も下に待機しているという状況にあった。そんな中、昼には3羽の雛が巣を出て、そのうち2羽はまた地上に降りていて、小道の下に隠れたりしていた。

ところで、このユキホオジロの番いを観察していた気がついた事であるが、どうも別の場所にも巣があり、別の雛がいるようなのである。親は時々餌をくわえてそのまま観察中

ユキホオジロの巣立ち雛

の巣とは別の場所に行くのである。私は同一番いが2ケ所に巣を持っていて両方に給餌しているのではと思っていたが、最近のバーダーに載った記事を見て、やはりそうかと思った次第である。北極圏で繁殖する鳥の中には、ヒレアシシギのように厳しい自然の中でいろいろな繁殖戦略を見せるものがいるが、このユキホオジロの繁殖もまた短い北極圏の夏に少しでも多くの雛を残す為の興味ある生態といえる。観察を終わって午後から再びツンドラに出た時、やはりここで繁殖している同じホオジロの仲間のツメナガホオジロに出会ったが、こちらは果たしてどんな生態を持っているのだろうか。

ハクチョウの孵化に出くわす

ユキホオジロの観察を終わった翌日の7月7日は日本では七夕であるが、ここチャウンでは小雪がちらつく1日となった。午前6時に外に出ると、ユキホオジロのピョロピョロヒョロリーというおだやかな囀りが聞こえ、オジロトウネンがチュリリリ……と鳴きながら求愛飛翔のような飛び方をしている。今日は午前と午後の2班に分かれて、モーターボートで河口近くにあるツンドラまで探鳥する事になった。川を猛スピードで下る間、鳥がいないかと注意してみたが、水面にほとんど観察されなかった。そういえば滞在期間中もチャウン川に鳥を見たのは少なく、ビロードキンクロの小群を見たくらいであった。ボートを降りて岸に上がりツンドラを歩いて行くと、全身が煉瓦色をした夏羽のハイイロヒレアシシギが現れた。一緒の人達はあまり関心を示さないまま先へ進んで行ったが、私は感激してこのシギを何枚も写真に撮った。ここでは、アカエリヒレアシシギはよく見られるが、ハイイロの方は珍しくてここで見たきりであった。皆を追いかけて水際まで行くと、先の方に小さな砂州があり、鳥が集まっている。望遠鏡でのぞくと、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ケワタガモ、メガネケワタガモ、コオリガモなどのカモ類とセグロカモメの巣が5個位、さらに近くには、シロカモメ、クビワカモメ、キョクアジサシがいた。北極圏で見るヒドリガモやアメリカヒドリには懐かしさを感じた。さらにツンドラを進んで行くと、少し小高くなったところにハクチョウの巣があり、巣には親鳥が座っている。近づくと立ち上がり両翼を大きく広げて威嚇する様にして巣を飛び出した。何とその巣の中には孵化間もない雛2羽と、もうすぐ孵化するらしい卵が3個あった。白い縫いぐるみのような雛はかわいいとしか言い様がない。しかし上空にはシロハラトウゾクカモメが舞っていて、長く巣を空けておくのは危険である。私たちは急いで写真を撮ると早々に引き上げる事にした。巣から遠く離れた所で双眼鏡で見ると、もう親鳥は巣に帰っていた。朝は比較的暖かかったが、探鳥に出発する10時頃から気温が下がりはじめ、帰る頃には小雪がちらついていた。

ハイイロヒレアシギ

山原（やんばる）の森を訪ねて

上越市　山本　明

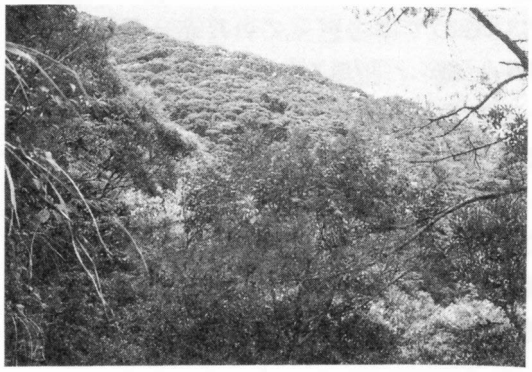
1996年9月14～16日に沖縄県宜野湾市(那覇市のすぐ北にある)の沖縄国際大学で日本鳥学会が開かれた。まだ沖縄に行った事がなかったので、ついでに観光や探鳥もかねてと軽い気持ちで出かけた。気楽な1人旅で、大会前に沖縄本島南部の戦場跡や首里城などを回り、大会後に念願の山原の森へ入った。

山原とは沖縄本島北部の山地を指し、本島中南部には深い山地はない。大会で配られた沖縄の「バードウオッチングガイド」や、大会中沖縄の人から色々と聞いた事を参考に国頭村与那にある琉球大学演習林へ入ってみる事にした。沖縄の鳥に出会えたらなお良いが、例え出会えなくても山原という森がどんなものか、中を歩いてその雰囲気に浸ってみたかった。

その日（9／17）那覇市内の宿を薄暗いうちに出て、早朝の定期バスで名護市へ向った。1時間40分程かかって名護市に着き、バスを乗り継いで辺土名へ。ここから先はバスの便が悪く一日数本しか通らない。1時間近く待って乗り継いだ。朝早く出ても与那に着いて歩き出した頃は10時を回っていた。

与那の集落を過ぎて1km程で琉球大演習林の施設があり、その横を通って林道に入り、川沿いに進む。別に入山の規制はしてないが、間もなく道が悪くなり、車は入れないように鎖で止められている。途中で探鳥の帰りだという年配の二人に出会った。鳥学会に出た後何人かでレンタカーで来たという。アカヒゲの囀りを聞いてきた、ヤンバルクイナは見られなかったが、もっと早く来た若い人達は、この上にある砂防ダムでチラット見たようだ、などと情報を話してくれた。

森の中の林道を歩いていたが、林木は殆ど常緑の広葉樹で中は薄暗い。これが亜熱帯照葉樹林といわれるもので、イタジイを主としオキナワウラジロガシ・イスノキ・イジュ・などが含まれるという。ここには直径20～30cmから40～50cmの樹木で大木はあまり見当たらなかった。演習林のため多少手入れをしているせいか、林道の近くは原生林という印象は受けなかった。



豊かな自然を秘める山原の森（琉球大演習林で）

暫く行くとヤンバルクイナが出たという砂防ダムがあった。水が浅く溜っていて、両岸は泥土が現れていて、その上を常緑樹の枝が覆いかぶさっていた。今にもヤンバルクイナが出てきそうな所ではあった。朝早く出る事があるというから、今の時刻では出る事はあるまいと思い、また林道を奥へと歩いて行った。

鳴き初めに“ヒーッ、ヒーッ”とウソのような声がするので、初めは鳥かと思ったがセミだった。後からオオシマゼミだと聞いた。この時期やたらに多く鳴いていた。林の中でコソッと鳥の動く気配がした。目を向けるとキツツキのようで、急いで双眼鏡を構えて見たら、何とノグチゲラではないか！盛んに幹を回って餌を探している。地面におりても餌をあさっていた。これはアオゲラと同じ習性だ。20～30mの所で暫く姿を見せてくれた。500mmレフレンズを付けたカメラを取り出し

てみたが、暗くて写せなかった。

ノグチゲラを見ている間に、明るくはっきりした囀りが近くから聞こえてきた。声質からすぐアカヒゲだなと分かった。ノグチゲラを見ていたので、残念ながらアカヒゲの姿を探すことができなかった。ノグチゲラが飛び去ったとき、アカヒゲはもう鳴き止んでいた。

その後更に林道を奥へ終点近くまで行ったが、特にこれといった鳥には出会わなかった。

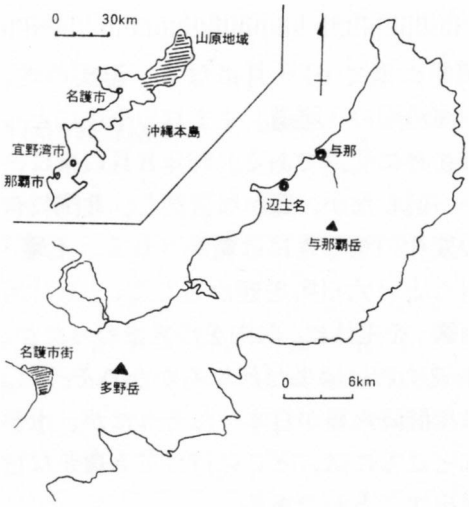
9月も半ばを過ぎており、山の鳥の繁殖期も終わって移動しているためか、鳥は意外と少なかった。結局10：00～13：00の間に与那の集落から4km程（林道は3km程）を歩いて出会った鳥を出現順に挙げると－

リュウキュウツバメ（F・V）イソシギ（F）ウグイス（S）キセキレイ（V）ヒヨドリ（C・V）シジュウカラ（V・C）ノグチゲラ（V）アカヒゲ（S）ヤマガラ（V・C）コゲラ（V）サンコウチョウ（V）カワセミ（C）キジバト（F）ハシブトガラス（F・C）など15種であった。

前記「バードウオッチングガイド」には、ここでのノグチゲラは希の方に入っていたので、出会えたのは幸運だったかも知れない。またアカヒゲの囀りも聞いて、一応満足すべき所と思い、山原の森を後にした。

その晩は名護市にある名護青年の家で行われた日本鳥学会主催の市民公開シンポジウム「絶滅の恐れのある鳥類とその研究」に参加した。ノグチゲラの現状についても報告があった。山原の東側の相当部分はまだ米軍の演習地で、開発などの面では幸いしたが、ノグチゲラをはじめ希少鳥類について、山原地域全体にわたる十分な調査はまだされていないという事であった。

翌朝、泊まった青年の家（山の上にある）から街へ歩いて下る途中、カラスバトがすぐ近くで鳴いていた。この鳴き声は鳥学会の会場で録音を聞いてきたのですぐ分かった。人が叫ぶような特徴ある声だ。姿を見ようと探したが黒い姿のせいか見つけられなかった。



名護市の近くにある多野岳（385m）は、この時期アカハラダカの渡りのコースで、上昇気流があると山頂から次々に飛び立って行くという。あいにく台風が近づいて風が吹いてきたが、夕方の空便には間があるので思い切って行ってみる事にした。山頂には施設があり道は舗装されているというので、名護からハイヤーで行き9時頃着いた。やはりタカは出なかった。林の中にひそんでいるかなと覗いてみたが、その気配はなかった。

帰りは山頂より麓のバス停まで4km程の道程をゆっくり歩いて下った。時々陽も射すくらいの天候だった。タカらしい鳥が高い所を数回飛んだ。1度は低いところをアカハラダカと分かる距離を飛んでいった。翼端の黒い部分がはっきり見えた。その他は大した鳥に会わなかった。近くで見たヒヨドリがこちらのものより黒っぽいのが印象的だった。

山原の森をかいま見てきたが、南北30km東西12km程の狭いこの山原の地に、ヤンバルクイナ・ノグチゲラをはじめ、今までわかっているだけでも動植物合わせて192種の固有種が生存成育しているとは、正に驚異的な事である。山原も開発など種々の問題に直面しているが、この貴重な自然を何とかこのまま残したいと切に思うところである。

銀山平の探鳥会に参加して

南魚沼郡六日町　駄賀恒男

新潟県に来て10ヶ月になる。温暖の地、瀬戸内海沿岸の「尾道」生まれの小生にとっては、まさに北国である。昨年8月以来ほぼ季節が一巡したが、豊かな自然と、北国特有のその変化の激しさには驚かされる。土曜・日曜日ごとに六日町を起点として、「森林浴の森百選」を主体に、県内を歩きまわったが、全て踏破するにはまだ何年もかかりそうだ。本県は年間降水量が日本一だそうだが、水が豊かなところには、どこに行っても豊かな自然を見出すことができる。

今回、総会と探鳥会が催された銀山平は、初めての場所だったが、平安末期・江戸そして現代と、人々の生活のあとと開発の歴史が感じられた。大自然の織りなす造形と、以前人の住んでいた後の荒れ地や大人造ダムのミックスした光景は、ナチュラリストの端くれの小生としては、いささか複雑な気持ちにさせられた。こんな時いつも思う事だが、我々人間が快適に生活するために自然を開発する時、人は自然の中で生かされている事、自然の恵を享受してきた事、我々の子や孫にこの大切な自然をより豊かな形で伝えて行く義務がある事を痛感するのである。連日の新聞紙上でイヌワシの問題が登場しているが、クマやイノシシによる被害の問題と同様、我々は後からやって来た事をきちんと認識し、少なくとも先住者を絶滅の危機に追いやる様な身勝手さを反省し、もっともっと謙虚になりたいものである。

さて、今回の探鳥会で初めて見た鳥は、ニュウナイスズメとノジコ、初めて聞いた鳥は、マミジロとジュウイチそれに夜のコノハズク。いずれも図鑑や声の図鑑で、姿や声は知ってはいたが、やはり本物は感動的で素晴らしい。特に初日の夕方、近くの森の方から聞こえてきたマミジロの「キョロン、ピュイーン」と一声続く声は、実に印象的で、妙なる音色であった。

探鳥会の心得として、ある先輩から「できるだけ先頭を歩きなさい」（鳥を見る機会が多くもてる意味か？）と教えられた事があるが、木も草も昆虫も見たい欲張りの小生は、いつも先頭から遅れてしまう。そして鳥は誰かに見つけてもらって、プロミナーをセットして覗かせてもらって、なるほどこれが「ノジコ」か、確かに目の回りに白い輪があるなあ！と感心し、おもむろに自分の双眼鏡や、チッポクンで鳥を探す。若干後ろめたい気がするがこれが小生の探鳥のスタイルになってきた。

今回総会の後で「イヌワシ」をスライドで勉強させてもらい、又最近TVでイヌワシの生態を研究する写真家と動物学者の姿を見たが、小生にとっては遠くから双眼鏡で小さな姿でしか見えないものを、あれほどまでに身を入れて探究し保護しようとする姿勢には本当に頭が下がり、「自然保護」の大切さをひしひしと感ずることができた。

いずれにしろ本県は、春夏秋冬を通じて野鳥観察には持って来いの場所である。諸先輩の話に耳を傾けながら、心ゆくまで鳥の姿と鳴き声を、更には大自然の生き様をじっくりと見つめて行きたいと思う。

初冬の五頭山の鳥

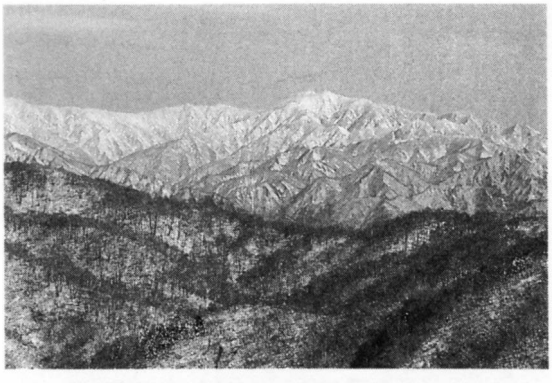
東蒲原郡津川町　渡部　通

五頭山は名前の通り、五つの峰から成り立っており、北端の出湯温泉側より順番に五ノ峰、四ノ峰……と名前がついている。都市近郊に位置している事から、家族連れや中高年の登山者が多く、最近では暖冬少雪傾向を反映して厳冬季に入山する人も多くなってきている。五頭山には、これまで残雪期に数回訪れているが、今回、初冬の時期に登ることができたので、その一部を紹介してみたい。

●平成8年（1996年）11月17日：晴のち曇

朝からほぼ快晴状態。笹神村の出湯温泉の駐車場に車を止め、身支度を整えて出発する。

●登山口に広がる杉林ではヒガラ、コガラ、シジュウカラの混群が見られ、渓流ではミソサザイが時ならぬさえずりを響かせ、びっくりする。うす青い杉林から落葉を終えた雑木林の中へと進むと、林の中は朝日が注いで実に明るい。真紅な実をつけたツルリンドウを見つけたり、ムラサキシキブの瑠璃色の小粒の実に感動したりして快適な登高となる。視界の開けた弘法岩で一息入れる。上空をカシラダカの小群が飛んで行った。6合目付近からは昨夜に降った新雪がまだら状に見られるようになり、高さと共に白銀の世界へと変わってくる。8合目付近からは、新雪を踏み締めての登高となって粉雪が朝日に輝いてまぶしい程だ。山頂付近は約30cmの積雪で、一面が純白の世界。蒲原平野に吹き下りる山越えの風は強く、荷物等が吹き飛ばされないよう注意する。風の影響の少ない岩陰で暖をとり、熱いコーヒーをすする。一休みの後、山頂に立つと、そこは一大パノラマが展開し、澄んだ大気の中に数々の各峰が鎮座していた。西から南の方向には角田山や弥彦山が間近に見られ、守門岳や妙高連山、越後三山などが遠望できた。北の方角には、日本海のかなたに粟島が浮かび、北東には白銀と化した飯豊連峰が迫って見られ、特に主峰の大日岳は大きく圧巻だった。東から南東方向には、御神楽岳や、白山、粟ケ岳など東蒲原や村松の山塊等も鮮明に見ることができた。ザックを五ノ峰に置き、観察用具を携行して四ノ峰から一ノ峰まで足を伸ばしてみる。樹林帯の中でカモシカやノウサギの足跡を見つけたりするが、鳥は全く出現しない。再び五ノ峰に戻り、荷物を整えてゆっくり下山することとする。駐車場の出湯温泉に到着した時点で周囲は薄暗くなっていた。出現した鳥は少なかったものの、充実した山行きが出来た事に感謝して帰路についた。



写真：五頭山頂より飯豊連峰を望む

●登山口（7：45）→弘法岩（8：45）→五ノ峰（10：00）→四ノ峰～一ノ峰（13：50）登山口（16：00）

●観察した鳥

1）トビ 2）ヤマドリ 3）アオゲラ 4）アカゲラ 5）ヒヨドリ 6）ミソサザイ 7）ツグミ 8）コガラ 9）ヒガラ 10）シジュウカラ 11）エナガ 12）ゴジュウカラ 13）ホオジロ 14）カシラダカ 15）マヒワ 16）ウソ 17）ハシブトガラス 18）カケス　以上18種

支部の海鳥救助活動環境庁より感謝状贈られる

事務局

平成9年、年明け早々の1月2日ロシア船籍のタンカー「ナホトカ」号が、島根沖で座礁事故を起した事は、会員皆様の記憶に新しいところと思います。

この事故での海鳥たちの被害調査や救護、回収作業が当支部をはじめ日本海側の各支部や、自然保護団体で行なわれました。

（詳しくは支部報No.43の保護部報告を参照）

このほど、県支部に環境庁より、感謝状が贈られましたので、お知らせしたいと思います。

このような活動の一端が行政にも認められたという事は、それだけ自然保護に社会が高い関心を持っている事だと思います。

しかし、2月の評議委員会の各支部より海鳥の被害状況が報告され、新聞等でも取り上げられたにも関わらず、その後もタンカーの重油流出被害はあとをたちません。

海鳥救助や被害状況調査に感謝状が贈られる事以上に、このような事故や被害が少なくなる事こそ大切だと思います。

保護部、並びに会員の皆様のご協力に感謝します。ありがとうございました。

祝　県支部創立20周年記念誌「雪国の鳥をたずねて」発刊される

事務局

報告

平成9年6月14日、奥只見銀山平で開かれた第20回県支部総会で、当支部は支部創立20周年を迎えることが出来ました。

それと同時に20周年の記念誌も無事、予定通り発刊することが出来ました。

総ページ232、県内の探鳥地100ケ所を選び、うち60ケ所に探鳥コースを付けガイドとし、1995年までの県内における鳥類目録、計388種を収録しました。また、初心者用にバードウオッチング入門の手引きを解説しています。

経過について

5年前の上川村での総会の折、数年後は県支部の創立20周年になるので、何か企画をと提案が出されたのが発端でした。

総会での提案を受けて、年内に事務局で会員にアンケートを取りました。

結果は返答者の約7割（147／118）が、記念行事を行ないたいとの返答を得ました。さらに、その中の約8割（118／104）が、記念誌の発刊したいという結果となりました。記念誌の内容については役員会、事務局等で検討した結果、初心者に利用出来る探鳥地案内、ベテランに重宝される県産鳥類目録とし、翌年の役員、総会での承認されました。支部の幹事の中から編集委員会を組織し、約3年間の編集作業の末、完成しました。

会員の皆さんには探鳥地案内の原稿や、鳥類目録の記録の整理をお願いしたり、素晴らしい生態写真を提供していただきました。

このような記念誌が発刊できたのも、450人を越える会員の皆さんの協力があったからこそ記念誌が発刊出来たと思います。最後に何度も校正したにも関わらず、誤植等のあったことをお詫びしたいと思います。

発　行　1997年11月20日　No.44

発行人　大島　基　編集者　小林成光、末崎　朗、千葉　晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局　〒951 新潟市東中通1番町86番地28

☎025－229－2018　本間由紀子方　＜振替口座＞00610－1－6002